月刊　教育情報誌

明日への学び

第　８　号

２０１３年　４月　１５日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

「転換期」だからこそ 歴史から学ぶ

福井県教育長　**林　雅則**

○今こそ歴史に学ぶことが必要

・今、我々は、人口減少時代を迎え、歴史的な転換期にいる。社会経済システムには、様々な制度疲労が生じているが、グローバリゼーションが進む中で、教育も例外なく新たな段階を迎えている。今、まさに、創造と変革が問われる時代となっている。

・歴史を振り返れば、今と同じように「転換期」と呼ばれる時代が何度かあった。幕末・維新から明治にかけては、まさにそのような時代の代表だろう。こうした時代の転換期には、教育システムも大きく変化している。我々は、今、改めて過去の歴史を学び直し、若葉萌え盛る新しい未来に向け、不断の創造と変革に努めなければならない。

○「洞察力」と「行動力」を兼ね備えた岡倉天心に学ぶ

・幕末から明治を生き抜いた人物に「岡倉天心」がいる。本年は、生誕１５０年の記念すべき年である。天心は、横山大観、下村観山、菱田春草を育てるなど、日本の近代美術の盛隆に多大な貢献を果たした美術官僚であった。また、英文で「東洋の理想」、「日本の覚醒」、「茶の本」という、いわゆる「英文三部作」を著し、広く西洋人に日本人の心、文化、伝統美術を伝えた思想家でもある。

・天心は、両親が福井藩出身であった。天心自身は福井で生活したことはないものの、横浜生まれでありながら履歴書には「旧福井藩士」と記すなど、福井をこよなく愛していたという。

・私は、この天心に、次の２つの点で強い魅力を感じている。

・第一は、「鹿鳴館時代」における西洋一辺倒の思想が蔓延する中で、東洋文明の素晴らしさを堂々と主張したことである。

＜目　次＞

○転換期だからこそ、歴史から学ぶ　Ｐ　1
～特集～福井出身の著名人にインタビュー
○指揮者 齊藤一郎氏 インタビュー　Ｐ　4
○華道家 前野博紀氏 インタビュー　Ｐ　7
○ソムリエ 友田晶子氏 インタビュー　Ｐ１０
○中高の接続を考慮した授業改善を推進　Ｐ１２
○お知らせ　Ｐ１４

・天心は、日本の伝統文化を知るにあたって、中国や西洋、インドの社会や文化を深く理解した。そして、数々の王朝の覆滅などにより栄華が夢の跡となっている中国やインドの文化に比べ、日本の文化には、これらアジアの文化の形跡がしっかりと残り、かつ融合して独自色を輝かせており、「日本の美術史はアジアの諸理想の歴史」であることを論じて見せた。

・天心は、明治の初期に、８歳にして英語を学んだ。欧米の理解では、先頭集団にいたはずの天心が、西洋も東洋を学ぶべきと主張したのである。西洋か東洋か、伝統か革新か、国粋かコスモポリタンかという安直な二項対立ではなく、西洋も東洋も平等であり、伝統的でありながら革新的であり、国粋主義的でありながら世界主義的であるという立場から、懐の深い主張を行っている。

・第二は、西洋の日本に対する偏見と侮蔑に満ちた時代に、英文で三部作を著し、日本の伝統文化の価値を普遍的で妥当なものに昇華させようとしたことである。

・「東洋の理想」はロンドンで、「日本の覚醒」や「茶の本」は、ニューヨークで出版された。「他流試合」という言葉があるが、天心は、西洋諸国の中心において、堂々と、時には西洋文明に皮肉を言いながらも、東洋文明の正当性を主張したのである。

・こうしてみると、天心は、現実を単純化しすぎず、多角的に捉えようとする「深い洞察力」と「幅広い知識」を持ち、そして、孤立無援でも、怯まず自らの意見を主張する「行動力」を持ち合わせた人であった。

・今この閉塞した時代、希望の光である子どもたちにも、ぜひこうした資質を備えた人材に育ってほしいと願うばかりだが、福井の子どもの人材育成の大役を担う我々も、これらの力を培っていかなければならない。

○天心の生きざまを現在に活かす

《その１　―実社会を知る―》

・例えば、子どもたちとの関係を考えてみる。我々の使命は、無限の力を秘めている子どもたちの可能性を拓いていくことだろう。我々は、子どもたちに大きな夢を語り、世の中に興味を抱かせ、将来に向かって飛翔させてやらねばならない。

・そのためには、人類の長い歴史の中で培われてきた様々な知恵を教養として我々が持ち、それを子どもの成長段階に合わせて伝えていかなければならないのではないだろうか。こうした力は、どのような状況対応を迫られた場合でも、思慮深い判断をするための源となる。明日さえ分からないのに、単に世界の現状を伝えたり、短絡的なアイデアだけを身に付けさせても、子どもたちがこれからを生き抜くための指針にはならないのである。

・一方、地域との関係では、例えば農村部であれば、水田の「一反」という単位がどの程度の広さを示し、「何俵」の米がとれるのかなど、極めて実務的な話を知り、相手の懐に飛び込んで話をしなければ、真の意味での信頼関係など築けない。場合によっては、生活保護制度や企業経営などに関する知識も理解しておく必要がある。

・教育に携わるものは、ローカルからグローバルに至るまで、また、実務的なことから哲学的なことに至るまで、様々な教養や知識が必要である。もちろん、全てを知ることは困難である。しかし、「自分の専攻分野を極める」だけでは、教育者として十分な資質を持ち合わせると言えないのは明らかであろう。

《その２　―受け止め力を持つ―》

・インターネット時代が到来したこともあり、社会には様々な情報が満ち溢れ、また、それを入手することができる。しかし、実際に我々が消費できる情報量は、我々が選択可能な情報量のわずか１％であると言われている。だからこそ、我々が、現実の社会で直接触れることができる情報は大切にしたいものである。

・天心は、「茶の本」で、「名匠たちには常に何かごちそうの用意がある。ところが我々にはただ自らそれを味わう力がないために常に空腹である。」と述べた。我々は、無意識のうちに、自らの価値観を基に安易に、情報の取捨選択をしてしまっているのではないだろうか。

・仕事やプライベートで関係する人々との会話をまずは受け止め、その中の一言から、本質的なものを感じ取る感受性や想像力を持つことが必要だろう。「これは私と関係ない。」と片付けず、「何か少し気になる」「この人はこういう風に物事をとらえるのか」など、一旦思考を巡らす姿勢が大事なのである。

《その３　―横並び意識にとらわれない―》

・行政にしろ、教育にしろ、「均一なサービスの提供」ということに配慮することは重要なことである。しかし、そのことは、「サービスの改善をしない」ということと同義ではない。新たなことに挑戦する場合などは、まずはできるところから始めて、改善点などをクリアしながらそれを全体に展開するという手法もあり得るのである。

・新しいことを進めることに憶病になりすぎることは、現状に甘んじてしまうことになる。新たな挑戦に向けて行動力を発揮するのは、若手の特権である。上司は、若手の価値観をつぶさず、存分に働ける環境をつくっていくべきだろう。

・新しい年度を迎えた。子どもたちへの教育は、一日一日が勝負である。教育の専門家である教員と素人である行政が集団となり、異なる価値観がぶつかり合うことも、我々の「鋭い洞察力」と「幅広い知識」の醸成につながるであろう。本年は、現場の教師にも、様々な行政分野で活躍していただいている。そして、一人ひとりが迅速な「行動力」をもって実行する。生誕１５０年を契機に、我々は、天心の気概をもう一度思い出したいものである。

特　集

心に残る教師、そしてこれからの教師への期待

－福井県出身で各方面で活躍中の著名人にインタビューしました－

齊藤 一郎

東京学芸大学、及び東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。
伊藤栄一、遠藤雅古、岩城宏之、若杉弘、湯浅勇治、佐渡裕、パブレ・デシュパイ、レオポルド・ハーガー、エルビン・アッツェルの各氏に師事。在学中に安宅賞受賞。1997 年大阪センチュリー交響楽団を指揮してデビュー。2009 年 4 月よりセントラル愛知交響楽団常任指揮者。

○教師は感受性を高めて心細やかな対応を

私の福井での学校生活を振り返ってみると、小学校３年生の時の担任の先生は、私の心の中の陽だまりとなっています。特別なイベントをしてくれたわけではありません。しかし、１２年間の中で、学校に行くのにあれほどわくわくしていたのは、あの時を除いてほかにありません。

当時、先生は、生徒全員と交換日記を交わしていました。朝、我々から日記を受け取ると、一人ひとり丁寧に返事を書いてくれて、帰りの会に我々に返してくれるのです。励ましとともに、様々な種類のシールを張ってくれていて、みんなで競うように日記を書いていました。

先生は、非常に繊細な感覚の持ち主だったように感じます。当時、クラスに、いじめやからかいの対象になる児童がいました。ある時、その児童が、トイレに行きたいと言えず、失敗したことがありました。小学校中学年の頃ですから、周辺の児童は、興味本位でからかい、あるいは大好きな先生の前でそのようなことをしたことに腹を立て、その児童を傷つけていたように思い出されます。

そうした状況に、先生は、おそらく自ら歩み寄って声をかけたのではないでしょうか。私は、何かの拍子に、先生がその児童と二人だけで話しているのを見かけました。その時の様子は、今でも先生を思い出すと、真っ先に私の脳裏に浮かんできます。まぶたに写るその光景は、どの名画よりも感慨深いものでした。何を話していたのかは分かりません。しかし、その児童を同じ目線からしっかりとサポートし、安らぎと前向きな気持ちを持たせたことだけは確信できます。

おそらくその児童は、自分が小学校の時のその出来事を一生忘れないで生きていると思います。そして、そのことを当時のクラスの児童は、皆知っていて今に至っている。とてもつらい思い出かもしれません。でも、その時に、自分のことを真剣に考えてくれた先生がいたということは、生き

る上での礎になっていると思います。

また、その光景を見た私の人生にも大きな影響がありました。先生の行動一つひとつが、児童の勇気になり、また、周囲の児童の人生にも影響を与えます。

全ての人々を分け隔てなく同じように接しようとすることは、教師でなくても非常に難しいことです。しかし、先生の些細な行動ひとつに子どもたちは敏感に反応します。
オーケストラでも、ある奏者に対し、音楽的な注文を団員全員の前で指摘すると、その奏者を傷つけてしまう可能性があります。そうした時は、一人でいるときに声をかけたほうが良い場合もあります。

子どもたちが許されない行為をしたときには、厳しく対応することが必要ですが、自分たちの言動が子どもたちに大きな影響を与えるのだということを自覚して、心細やかに接してほしいと思います。

○音楽の持つ力が子どもたちを変える

私が音楽の道に進むことになったのは、高校生の時に、ドイツのオーケストラの公演で、ブラームスの交響曲を聴いたことがきっかけでした。個性豊かな演奏家たちが一つになって、素晴らしい音楽を奏でていることに衝撃を受けました。私は、それまで医者になりたいと思っていました。しかし、その日を境に指揮者になりたいと決意し、それまでもピアノは練習していましたが、福井大学の先生に作曲を教えていただくなど、学校の勉強に加えて、毎日のように音楽のためのあらゆる努力をしました。

実は、この日までは、ピアノを習っていることを公にすることをためらっている自分がいました。当時のことを思えば指揮者の道に進むことは全くありえないことです。しかし、私の中で音楽の何かがちょうど芽生えようとしており、そのタイミングでオーケストラと出会い、一気に咲き誇りました。人生を左右する大きなライフイベントになったのだと思います。

子どもたちも、私のように、皆、何かのきっかけで将来の夢を意識するようになるのだと思います。そのためには先生には幅広い視野を持ち、子どもたちを広い世界へいざなっていってほしいと思います。

本物の音楽は、人を惹きつける力を持っています。私は、２００４年ごろから子どもたちの芸術鑑賞事業の一環で、１００校以上の学校を訪問してきました。不思議なもので、始まる前は、非常に騒がしい学校も、ベートーヴェンの交響曲を楽団が奏で始めると一気に静寂になったりするものです。校長先生の「静かにしなさい！」の一喝よりも効果があります。生のオーケストラの演奏に触れたことのない子どもが驚嘆し、音楽に心を開く瞬間なのです。

学校も個性の集まりです。指揮者と教師、オーケストラ奏者と児童の関係もよく似ているのではないでしょうか。楽員と指揮者の間にはヒエラルキーはないのですが、交響楽団という大勢の集団から調和のとれたハーモニーを引き出すには、互いの信頼関係が不可欠だと思います。

例えば、我々指揮者は、まず演奏者の「邪魔をしない」ことに徹します。実は、この「邪魔をし

ない」ということがかなり難しいのです。ここから「引き出す」ということになると相当のエネルギーがかかります。学校でも、まずは子どもたちの個性の邪魔をせず、その上で可能性を引き出すことが大切だと思います。

ところで、子どもたちの芸術鑑賞事業で学校にうかがうと、曲の終了後の拍手が非常にわざとらしいと感じるときがあります。先生が演奏者を気遣って、学校で拍手の練習をしているのでしょうか。手をたたくというのは、人間の主となる感情表現の一つです。音楽が終わったら拍手をするというものではありません。

音楽は、「こういうものなのだ。」と、あらかじめ予習して理解するものではありません。感情表現はできるだけピュアな方が良いと思います。別に拍手をしたくなければする必要はないし、つまらなかったら寝ていればいい。先生には、ぜひ子どもたちが自由に鑑賞し、自然と感動できる能力を育んでほしいと思います。

また、音楽は、子どもたちを変える力も持っています。例えば、私は芸術鑑賞事業において、生徒が指揮者を体験するといったこともしています。そのような時は、率先して手を挙げる子どもでなく、敢えて目立たない子ども、騒ぎ出しそうな子どもを指名するようにしています。

オーケストラの指揮を執った彼らは、水を得た魚のように活き活きとし、演奏後には自信を取り戻すことがあるのです。そして彼らを見る生徒たちの目も変わってきます。指揮者体験一つで、自分自身と周囲の生徒との関係を変えていく力も持っていると思います。

○これからの子どもたちの学習の上で大事なこと

また、子どもたちに、例えば作曲家たちの人生についてなど、何事でもルーツや先人の人生に思いを馳せる時間をあげてほしいと思います。私は、音楽家の道を進むようになり勉強したのですが、これをすることで歴史がとても好きになりました。

クラシック音楽は、２００年もの間、継承され、愛され続けてきた楽曲です。それらを生み出した音楽家たちの人生は、とても壮絶です。ベートーヴェンやモーツァルトがどんな人生を歩んで、どのような時代を生きたのかに思いを馳せ、作曲家の創造力がいかほどのものか知ることで、彼らの音楽からより深い感動を味わうことができると思います。

一つのことから深く深く歴史を学ぶことは、思考力を重視する今の学校教育にもあっている気がします。忙しいでしょうが、そうしたことにもどんどんチャレンジしてほしいと思っています。

（平成２５年３月３１日　ご本人にインタビュー）

前野 博紀

華道家。同志社大学文学部卒。
29歳のとき、父親の死と、華道草月流との運命的な出会いにより華道家を志す。
最近は、NHK「ニュースウォッチ9」の花装飾を多く手掛ける一方で、「平成のはなさかじじぃず」の中心メンバーとして、東日本大震災復興支援活動を行っている。

○先生は生徒を理解して

先生との思い出ですが、中学校２，３年生の担任で、音楽を担当されていた先生のことが忘れられません。あの頃、私が暮らしていた田舎では、「うちの子を厳しく指導してください」というような風潮が保護者の中にもあって、ナイーブな少年だった私は、そのような厳しい指導を行う先生のことで悩んでいました。そのような時、担任の先生が遠くから見ていてくれて、救ってくれたことが何度もありました。その先生は、母親のようなやさしい先生で、私は悩みを打ち明けることができました。当時は、美術や音楽といった芸術の教科の先生よりも、体育の先生が尊敬された時代でしたが、担任は私のことをよく理解してくれて、「あなたは感性が高いから、音楽や芸術が向いているよ。」と言ってくれました。合唱コンクールで指揮を執るよう勧めてくれたこともあり、私の感性を活かそうとしてくれました。実際、私は音楽室のグランドピアノの蓋を開けた時の、黒の中にゴールドの線が並んだ、造形的な美しさに惹かれるような少年でした。

中学校の時には、小浜の自然にも大きく影響を受けました。当時、二駅の距離を電車で通学していましたが、部活動を退部した私は、部活動で遅くなったふりをして、１０㎞の道のりを歩いて帰宅しながら時間を潰して帰るということもありました。その時、一面の菜の花やキラキラした川面と傍らに生える土筆といった風景が、「こんなこと、たいしたことないな」と思わせてくれ、私のつらい気持ちを救ってくれました。華道家になって、花との出会いは何かと尋ねられることもありますが、青空と紅葉のコントラストや、あまり高くない山の稜線等の原風景が、今の自分の作風に影響しているのは確かだと思います。

○先生の熱意を生徒に届けて

高校生になり、若狭高校に入学して、あるひとりの先生と出会いました。やたらと熱心な若い先生だなという印象を受けました。当時の若狭高校は、学年を縦割りにして活動するホーム制という独自の制度を取り入れていましたが、その先生は２，３年のホームの担任でした。その頃、制服の上にスタジアムジャンパーを羽織っての通学が禁止されましたが、その先生は「こんなことまで校則で縛るのはおかしい」と憤っていました。おかしいことはおかしいと言える感覚をお持ちだったのかもしれません。授業も非常に分かりやすく、古典の助動詞の活用を『ギザギザハートの子守歌』に乗せて教えてくれました。今でも、歌えますね。生徒たちの進路実現のために工夫を凝らして、熱心に教育に携われていたのだと振り返ってみて、改めて感じています。

私も含め、福井では、台所や居間で宿題をする子どもが多かったようで、見守られている中で安心して勉強に取り組めた気がします。ご近所のおばさん方も、「おかえり。」と声をかけてくれたり、

「あの子、最近元気ないな。」と子どもたちをいい意味で「見張って」くれていました。人を思いやる気持ちが風土として醸成されている、それが福井の良いところであり、学力の高さにも通じているのではないでしょうか。

○私の転機

前野家の長男として、両親の期待を背負っていた私は、教員になって故郷に戻ってくるという約束で大学へ進学しましたが、卒業後は大阪でホテルマンとして大手ホテルに就職し、その後、ビジネススクールのインストラクターとしてビジネスマンの先生をしていました。当時はリストラの嵐が吹く時代で、私が勤務していた会社でも、６０人のインストラクターのうち２０人が解雇されました。生き残りをかけたテストは、社長の目の前で与えられた課題についてレクチャーするというものでした。私は、半ばノイローゼに陥りながら、５０もの課題を必死にマスターしました。そしてテスト本番、幸いにも自分がもっとも得意とする課題「営業マンの誇りとは」が出題されました。テストに勝ち残り、資質を認められて、東京へ転勤となりました。しかし東京で待ち受けていたのは、同僚との厳しい競争、そして自分の父ほどの年代のビジネスマンを教育しなければならないのに、若手である自分の言葉が伝わらないという壁でした。疲弊しきっていた私は、そこで衝撃的な花との出会いを果たします。たまたま会社から草月流の展覧会のチケットを手に入れ、会場に足を踏み入れた私は、花の力に圧倒されました。そして私と同様に花に惹きこまれている人々を見て、草月流を、勅使河原蒼風をもっと知りたいという衝動にかられました。

ちょうど時期を同じくして、父が５９歳の若さで亡くなりました。父の死は、私にとって大きな転機となりました。あの時、父を失っていなかったら、私はそのままビジネスインストラクターを続けていたことと思います。自分の進むべき道に迷いを感じ、母に相談したところ、母は「人様に迷惑をかけなければ、本当にやりたいと思うことをやりなさい。」と私の背中を押してくれました。跡取りとしての役目から解放されたこと、人間の命はいつ尽きるとも分からないという事実を突き付けられたことが、私を華道の道へと突き動かしたのです。

草月流との出会い、父の死、それらの出来事の連鎖が私の人生のギアを変えることになるのですが、いま振り返ると、３０歳でよく踏み切れたなと思います。

○子どもたちの未来に花を咲かせたい

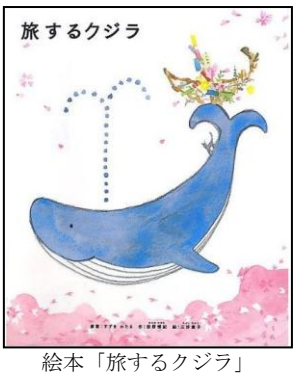
大卒、正社員で、それなりに給料をもらっていた生活から、時給７５０円のアルバイトとして花屋で修業しながら、草月流に入門し、華道を学ぶというような生活がスタートしました。現在は、独立し、花を活ける仕事をしながら、華道家として華道教室の生徒さん方を指導しています。

そして、これからの私の課題は、子どもたちの未来に花を咲かせるために、どのような貢献ができるかということです。

現在、東日本大震災で被災し、両親を失った子どもたちの学資資金を援助するため、ＮＰＯ法人を立ち上げようとしています。

また、「がれきに花を咲かせましょうプロジェクト」を展開し、ワークショップ等を開催しながら、東日本大震災の瓦礫を活かし、クジラのアート作品を子どもたちと作成しました。素晴らしい作品に生まれ変わった瓦礫を全国の方に見ていただき、復興の妨げとなっている瓦礫処理について、

理解を深めてもらいたいと願っています。また、プロジェクトの活動内容を『旅するクジラ』という絵本にまとめました。ささやかかもしれませんが、現実に起こった出来事を通して、少年少女たちが未来に向けて、花を咲かせようと思ってくれるような優しさ、強さを伝えられる本になって欲しいと思っています。



絵本「旅するクジラ」

私は、教育者ではありませんが、華道の指導者として、「花を切る」ことから「花を再生」することで「命」について学ぶ「花」という時間が、日本の学校の時間割にできたら良いなと思っています。欧米にも、フラワーアレンジメントがありますが、花を「素材」として扱います。しかし、華道では、花は「活ける」ものです。これは、日本人が古来から持つ、花の命も人の命も同等であるという感性や、花を活けることは人の生きる道を学ぶことであるとして文化構築されてきた経緯が背景にあります。

華道は花の命を絶たなければ始まらないものです。だからこそ、いただいた命を活かす道を探るのが、華道であり、それは、人間の生き方そのものに通じるものがあると思います。華道を通して、本当の意味での豊かさとは何かを伝えたいと思っています。

○子どもたちの種に水と光を注ごう

指導するというのは、知識や哲学を植え付けるのではなく、子どもたちが持っている種に水と光を注ぐことであると考えています。

華道の師匠として、生徒さんたちを導くのに、一人一人のもっている種に、どのような水や光を与えて育てていくのかを大切にしています。花を活けるというのは、一つの器に個性豊かな花々をバランスよく調和させるということです。人を活かすのも、花を活けることと同じであり、あるべきところに配置されることで活きてくると考えています。校長先生は華道家で、教員や子どもたちが花であり、校長先生がどのように教員や子どもたちを活かすのか、手腕を問われているのではないでしょうか。

福井県の子どもたちの学力、体力は全国でトップクラスですが、これは、先人たちがまいた種に花が咲いた結果であるとも言えるのではないでしょうか。体力の高さは、海の幸、山の幸に恵まれ、食生活がよかったということも要因にあるかと思いますし、学力については、福井県が幕府にとっての要所であり、福井県の武士が、志を高く持って学び、立身出世してきたということが、もしかしたら影響しているかもしれません。

これから、福井県が次世代の種を蒔くのであれば、学力を維持しながら、「心の力」を育てていくことが必要です。「ナンバーワンでなくとも、オンリーワンになればいい」とも言われることがありますが、私は、「オンリーワンの前に、ナンバーワンになりたい」という気持ちを持った子どもたちが増えてほしいと思います。ナンバーワンを目指して努力した結果、１番になれなくても、それはそれでいいと思います。スポーツや芸術も、「ナンバーワンになりたい」と思うからこそ、強くなり、美しくなるのだと思うのです。

先生と子どもたちの関係も、自分の子どもの頃からは大きく変わってきていると思いますが、子どもたちを育てるためには、先生が生徒から尊敬され、信頼されることが大切だと思います。横並びの関係ではなく、時には厳しく、そして温かく生徒に接する。福井県の先生方であれば、生徒たちと良い関係を構築できるのではないでしょうか。

学力、体力も高くて、豊かな人間性を持った子どもたちが育つ県、ふるさと福井がそのモデルとなることを願っています。　　（平成２５年４月９日　ご本人にインタビュー）

友田 晶子

東放学園放送芸術専門学校卒業
ソムリエ／トータル飲料コンサルタント
ふくい食のアンバサダー／ふくいブランド大使
東京芸術学舎非常勤講師

○子どもたちの心を掴む努力を

明道中学校で出会った社会科の先生が印象に残っています。とてもチャーミングな先生で、叱り方にもユーモアがありました。例えば、授業中に騒いだ生徒に、「黒板に磔の刑だ」といって、黒板の前に手を広げて立たせ、チョークで周りを囲んで、「この線からはみ出したら失格！」と言って叱っていました。怒られているのに、怒られた本人も周りも思わず笑ってしまう。そんな子どもたちを惹きつける力を持っていて、先生のおかげで、私は社会がとても好きになりました。

私の現在の仕事は、飲料コンサルタントということで、ワインや日本酒・焼酎、チーズ等、食に関する一般向けの講座も行っており、人に伝える、教えるという意味では、教えるプロである学校の先生にも共感できる部分があります。

昨年、美方高校の食物科の生徒に向けて、福井の食の魅力や食の仕事のやりがい等について講演を行う機会をいただきましたが、どうしたら生徒たちが話を聞いてくれるだろうかということに心を砕きました。生徒が退屈することがないよう、化学調味料と昆布出汁（福井敦賀産のもの）の違いを舌で感じてもらう等の試飲・試食のワークショップも取り入れながら話を進めました。生徒たちから「学びたい！」という意欲が伝わってきて、とてもよい雰囲気になったと感じました。

ビジネス界では、人に何か伝えたいと思っても、こちらから提案をしない限り、話を聞いてもらうことすらできません。教育もサービス業の側面があると思いますので、教員は「子どもたちが話を聞くのが当たり前」と思い込まず、子どもたちの立場に立って、想像力を働かせて、子どもたちの興味関心をかきたてるような授業を行うよう心掛けてほしいと思います。

もちろん、特別なパフォーマンスがなくても、話の内容が深く、感動的な話をできる先生もいらっしゃるでしょう。そのような先生は、そこに至るまでのキャリアや生き様を持っています。しかし経験の少ない若手の先生方には、授業を聞いている側の子どもたちのことを考えて、伝え方を工夫する必要があると思います。

○頭が柔らかいうちに海外を目指して

最近の若者は小さくまとまっている感じを受けます。また、日本に居ながらにして、おもしろいこと、楽しいことがあり、がんばって海外に行かなくともよいとの風潮があるように思います。しかし、若いうちに、特に１０代、２０代のうちに海外に行っておくべきだと思います。グローバル化の流れは止めることはできないし、これからは、日本で仕事をするにしても、英語は必須になります。さらに、異文化について理解を深めることも重要です。柔軟で、感性の豊かな１０代のうち

に、海外に渡り、異文化に触れる経験は、その後の人生に大きな影響を与えると思います。

私の場合は、海外に興味を持ったのは、趣味の世界からでした。音楽の中でもロックが好きだったので、アメリカに憧れを抱き、１６歳の時にアメリカで１カ月ホームステイをしました。当時は、学校の先生に引率していただきましたが、今思えば、先生方も大変だったと思います。アメリカでは様々なカルチャーショックを受けました。当時日本にはまだないディズニーランドに行きましたが、感動したのはアトラクションなどではなく、高齢のご夫婦が手をつないで楽しんでいることでした。「アメリカってすごい！日本と全く違う世界なんだ」と感じたことが、最も衝撃的な体験でした。また、滞在先は、人種差別が根深く残るミズーリ州セントルイスの田舎町でした。白人のホストファミリーから黒人に対する激しい人種差別の話を聞かされ、人種差別とは、日本人のアイデンティティーとはなんだろうということを考えさせられました。

また、アメリカの大都市を訪問しましたが、東京さえ知らない福井の高校生にとっては、ニューヨークという大都市の持つ猥雑さやエネルギーに刺激を受けました。いずれ都会で生活することを決めていたので、「都会」を知り、心の準備をするためにもいい機会であったと思います。

○「食育」で福井を元気に

私が理事を務める「日本酒きき酒師」の資格認定を行う協会『日本酒サービス研究会』が今年で２５周年になります。これは、日本酒もワインと同じ醸造酒であり、ワインのソムリエと同様に、日本酒の知識やテイスティングの技術を身につけ、日本酒の楽しみ方を提案する人材を育成しようというものですが、この試みもようやく浸透してきました。日本酒にはもともとこうした発想がなかったため、人気が衰退していましたが、最近持ち直してきています。酒造業界もまだまだ変わっていかなければなりません。

昨今、日本の食文化が見直され、政府も「クール・ジャパン戦略」として、食文化についても魅力を高め、世界に届けようという取組みを行っています。日本酒も國酒として認定され、国家プロジェクトとして政府が輸出の後押しをすることが決定しています。

海外に目を向けることと同時に、日本にも素晴らしい文化があるのだということを、若者に知ってもらいたいし、先生方には、日本の、福井の素晴らしい文化を子どもたちに伝えていっていただきたいです。

福井県は、「食育発祥の県」であることを、もっと強く打ち出すべきです。「食育」は、今後ますます注目を集めます。「食育」は、子育てや精神論、観光や農業等、いろいろな方向に発展する可能性を秘めた宝物です。「食育」をどう活用していくか、まずは大人たちが勉強する必要があります。「スローフード」という言葉が海外から入ってきて、もてはやされていますが、足元に目をむければ、もともと日本の伝統的な食文化はまさしく「スローフード」を実践してきました。逆に日本の食を世界に発信していく絶好のチャンスです。福井県には食を世界に発信する潜在能力があります。福井県で「食育」を推進し、世界に誇れる福井の食文化を広めていって欲しいです。微力ではありますが、「ふくい食のアンバサダー大使」として、お手伝いできることをさせていただきたいと思っています。

（平成２５年４月９日　ご本人にインタビュー）

中・高教員向け

中高の接続を考慮した授業改善を推進

「学力向上センター」では、「福井型１８年教育」の大きな柱の１つとして、中高の授業接続を重視し高等学校の学力を向上させる取組みに昨年度から着手しました。今年度は、実際の授業改善を進めていきます。

○中高接続は教員の懐を広く深くし、分かりやすい授業に変える

「今でも高校入試対策で多忙を極めているのに、さらに高校のことまで考えて新たなことをする余裕はない。」という意見を中学校教員から聞いたことがあります。確かに中学生にとって高校入試は目標ですが、希望の高校に入学することで人生の目標を達成したわけではありません。中学校の教員は「中学での学習が高校でどのようにつながり発展していくか」を把握すべきであり、高校の教員は「中学校でどのレベルまでどのように学んでいるのか」を理解すべきです。これにより、生徒の疑問に即座に答えることができるようになり、指導方法も状況によって微修正することが可能になります。

○「中高授業接続ガイド」の活用

「明日への学び」創刊号で記事になっていますが、昨年度８月、まず中高の教員が顔を合わせて互いの指導内容や指導方法について意見を出し合い、自分の授業方法を変えていくことを提案しています。今年度はどの学校でもその提案を実行に移していく年度だと位置づけています。具体的な実践例は、昨年度３月に発行した「中高授業接続ガイド」です。

３部構成で、第１部は、特に経験が浅い教員に対して、小中高の学習内容の系統性について解説しています。学習指導案を立てる際には単元のつながりを意識しますが、これを活用すると便利です。第２部が授業改善事例集でこのガイドの中心部分です。第３部は入試に関する解説で、特に県立高校の入試で、配点や学力差が見られた問題について解説しています。これまで公表されていなかった内容ですが、有益な情報と考えて「ガイド」に掲載しました。

各学校には全教科合冊を１部、学校規模に応じて教科別の分冊を教員用に配付しました。

○教科別重点ポイントの徹底

これまでもいろいろな授業改善事例集を県教育委員会として発行してきているものの、なかなか実際の授業改善に活かされていないという現状があります。各教員や中教研等で研究を進めているので、一斉の活用は難しい面があったようです。しかし、中高接続については新たな視点です。是非全県的に進めていきたいと考えています。

中学校で今年度必ず実施することを、次ページに、教科別重点ポイントとして示します。数学を例に挙げますと、中学校では、関数のグラフをかく際に、方眼紙を用いてかくことが一般的ですが、一次関数でも二次関数でも、方眼がないところでグラフをかいて概形を捉えて、問題解決に活かすということを進めます。この活動が高校数学の授業で活かされます。逆に高校では、今年度の高校生はこのような活動は未経験であることを理解し、方眼がないところでのグラフのかき方や用い方を指導するところから授業を始めてください。入学して間もない時期に学習する関数の授業での、つまづき解消につながります。中学校では各教科の重点ポイントについて、指導主事も共通理解をし、実施前にはアクションを起こして、全県的に進めます。この実践をきっかけに、他にも改善すべき点を探して授業力を高め、分かりやすい授業づくりを進めてください。

「中高授業接続ガイド」教科別重点ポイント

	1年	2年	3年
国語	○『竹取物語』P.54 『竹取物語』の好きな場面を紙芝居の形式で音読する。古文を暗記し古典特有のリズムを楽しんで学べるように工夫し、高校で学ぶ文化への興味につなげる。	○『平家物語』P.57 『平家物語』中の登場人物の立場になって『平家物語』の一節を書き換えさせる。古文の表現に親しみを持たせ、当時の人々の生活や考え方に興味を持てるようにし、高校の学習につなげる。	○『論語』P.59 『論語』を自分の経験と照らし合わせて読ませ、論語の内容を引用して説得力のある体験文を書かせる。漢文を学ぶ意義を感じ、高校の漢文学習に意欲をもてるようにする。
社会		○「江戸幕府の改革」P.71～P.72 「大まかな時代の流れと時代の特色をとらえる」学習を色々な視点から作成したイメージ図を用いることで、高校での詳細な歴史的事象や「総合的に考察させること」につなげる。	○「国際経済の概念」P.73～P.74 中学校での「生徒の身近な消費生活を中心」にした学習内容を十分に扱い、実体験のない国際経済の実例を理解し易くさせることで、高校における経済法則や理論の学習につなげる。
数学	○「資料の活用」P.78～P.80 代表値の学習の中で、資料を読み取り、自分なりの考えを出し合うことで、分析することのよさを理解するとともに、高等学校数学Ⅰ「データの分析」を学ぶ必要性を実感する。	○「一次関数」P.77 グラフの式を求める時には、まず簡易グラフをかいて概形を捉え、計算だけに頼らず式を求めることで、グラフを用いることのよさを理解し、高校における関数の学習につなげる。	○「二次関数」P.77 放物線をかく際に、方眼紙を用いず、まず簡易グラフをかいてから、最大値・最小値等を求めることで、高校で学習する関数での、グラフを用いて効率的に関数の問題を解くことにつなげる。
理科	○「ベクトル概念の基礎をつくる」P.87～90 中学校1年生で初めて力をベクトルで表すことを学習する。この際に「矢印」を記号として扱うのではなく、ベクトルの概念（量や方向）としてしっかり定着させる。	○「動物の分類」での体験活動の充実　P.93～96 新学習指導要領において無脊椎動物を学習するようになり、イカなどの身近な教材を活用して、生物の体のつくりとはたらきの共通性を見いだす。	○「ベクトル概念の基礎をつくる」P.87～90 2つのベクトルの合成や分解で、「矢印」を記号として扱うのではなく、ベクトルの概念（量や方向）としてしっかり定着させる。
英語	○「話すこと」の指導 P38～41 質問に答えた後1～2文を付け加えて話す。相手を変えてペアトークを何度も行う中で、質問に対する様々な意見や表現に慣れる。高校において、質問に対して3～5文以上でまとまりのある内容で答えるための基礎を養う。	○「読むこと」長文読解の指導 P.50～53 オーラルイントロダクションで本文の概要をつかむ。速読後、意味のかたまりに注意しながら接続詞(if, that, when, because)が含まれた英文を精読する中で、高校での長文読解の基礎を養う。	○「書くこと」の指導 P68～69 マインドマップ等を用いて構成メモを作り、文と文とのつながりやまとまりのある英文を書く。その後、生徒間で評価し合ってよりよい英文になるよう修正する。高校での「論理的に書く活動」につなげる。

※ページナンバーはガイドのページです。これについては必ず実施してください。

参考図書

■福沢諭吉「学問のすゝめ」岩波文庫（採用内定者研修図書）

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず近代日本を代表する思想家が本書を通してめざした国民の精神革命。自由平等・独立自尊の思想、実学の奨励を平易な文章で説く不朽の名著に丁寧な語釈・解説を付す。（Amazon ウェブサイトより）

■柳田國夫「青年と学問」岩波文庫

柳田民俗学を貫くのは「経世済民」の志であって，世の中を賢くし良くするのが学問だとする考えは終生変わることがなかった。その主張は柳田自らの手に成った最良の柳田学入門である本書からつぶさにうかがえる。民俗学の責務を論じた表題作，知的発見のための旅を勧める「旅行の進歩および退歩」など十篇。

（解説　神島二郎　岩波書店ウェブサイトより）

■「教職課程５月号」（協同出版）　　－福井の教員が全国に授業づくりを提言－

教員志望者向け雑誌「教職課程」では、福井県の教員が「模擬授業対策　わかる、できる、チカラがつく　授業のつくり方、進め方」というテーマで１年間にわたり、連載を行っています。５月号は、小学校体育、中学校保健体育、高等学校音楽がテーマです。
是非ご覧ください。

芦泉荘からのお知らせ

～ ご家族での旅行・ご入学のお祝い・ご退職後の旅行に是非ご活用ください ～

● 選べる3プランをご用意いたしました ●
☆「青葉」１泊2食付 平日　8，100円
☆「杣山」１泊2食付 平日　9，900円
☆「文殊」１泊2食付 平日 11，500円

「杣山」、「文殊」につきましては、1名につき宿泊利用補助券2枚使用できます。
「青葉」プランご利用の場合は1枚使用できます。

ご宿泊の他、各種ご宴会（歓送迎会、パーティ、女子会）ご法要等、常時承っております。

詳しくは　TEL：0776－77－3200 までご連絡ください。

バックナンバーをホームページに掲載しています。

福井県のウェブサイト「学習・教育」のページに教育情報誌「明日への学び」のバックナンバーを掲載しています。

（http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/asuhenomanabi.html）

明日への学び　で検索してください。

ご意見をお寄せください。

住所　：福井市大手 3-17-1

連絡先：福井県学校教育政策課

TEL　：0776-20-0295
FAX　：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp